

「大嶽政治学」とは何であったのか？

—或いは、大嶽秀夫オーラル・ヒストリー『日本政治研究事始め』（酒井大輔・宗前清貞編，ナカニシヤ出版，2021年）への私註として—

渡 部 純

目 次

序

I. 「大嶽政治学」を可能にしたもの

II. 語られぬもの

III. 「ジャーナリスティック・アカデミシャン」としての大嶽秀夫

IV. ポスト「大嶽政治学」の可能性

結び

序

日本における同時代政治研究が1980年代に大きく変貌したことは、多くの論者が認めるところである⁽¹⁾。その中で、特に重要な画期と目されているのが、1987年、政治学専門雑誌『レヴィアサン』の出現である。創刊メンバーでレヴィアサングループと呼ばれるようになる村松岐夫・大嶽秀夫・猪口孝が、どのようにしてその学問を構築してきたかは、戦後日本の政治学史を考えようとする場合、極めて興味深いテーマとなろう。

このたび、酒井大輔が中心となった大嶽秀夫への聞き取りの成果が、『日本政治研究事始め』として公刊された。今や戦後政治学史研究の若き第一人者とも言うべき存在の酒井を编者として得たことで、本書はバランスのとれた適切な註をともなった、優れた戦後政治学回顧録となったと言えよう。本稿はこの

「大嶽政治学」とは何であったのか？

大嶽オーラル・ヒストリーを参照しながら、改めて戦後政治学史における「大嶽政治学」の意義と射程とを考察しようとするものである。以下、本文中（）内に示した数字は、本書の該当ページである。

I. 「大嶽政治学」を可能にしたもの

1. 大嶽秀夫という条件

まず、大嶽自身が語るところに即してその学問が何によって作られたのか、「大嶽政治学」を可能にした大嶽秀夫という条件とは何であったのかを確認するなら、さしあたり次の四つをあげることができよう。

第一は、その驚異的な語学力であり、第二は、極めてストイックな刻苦勉励の姿勢である。このことは、1983 から 85 年のドイツ留学の回想で特に印象的である。大学院時代ドイツ語文献を読んだことはあるとはいっても、第三外国語であったはずで（しかも学部在学中は演劇に熱中していて、第二外国語のフランス語も自信がなかったというくらいであるから、ドイツ語は京大卒業後に身につけたのだと思われる）、それが 30 代の終わりに日独比較を思い立ってからごく短期間に語学力（会話力も含む）を向上させ、二年の滞独で一書まで仕立て上げるというのは、常人のなせるわざではない（『アデナウアーと吉田茂』1986 年刊）。ドイツでは、昼食までの 4 時間は自宅での文献読解に集中し、その後に大学に出て講義を受けたり本を読んだりしたという（170-171）。大嶽がこの期間にどれだけの文献量を読破し情報を吸収したのであろうかとは、想像を絶するところがある。

また、それに先行する『日本の防衛と国内政治』（1983 年刊）の執筆過程もすさまじいものであった。毎週火曜日に上京してインタビューや国会図書館での調査を行ない水曜日に仙台に戻って執筆にかかり翌週月曜日には 50 枚の原

稿を出版社に出すという週刊誌連載のサイクルを30回も重ねたというのである(160)。もちろん仙台では、通常の講義・学内事務の負担もある(当時、学部での講義は金曜日であった)。流行作家なみのこんな政治学者が、戦後日本で大嶽以外にいるとは思えない。

第三は、常に新しいことに挑もうというフロンティア・スピリットであり、第四には、相当の負けず嫌いの性分である。大嶽は、多元主義のほか、ネオ・リベラリズム(新自由主義)、ポピュリズム、フェミニズムを日本政治分析に導入したのは自分であると誇り(v)、また、一人の人間が、地域研究ではない本格的な二国間比較を行なったのも自分が最初であろうとする(13)⁽²⁾。しかも、彼の比較研究は、日独比較さらには日仏比較で行なわれており、現在では日伊比較まで構想しているという。一国研究をこなすだけで汲々としている凡百の研究者から見れば、神がかったと言いたくなるほどの超人ぶりである⁽³⁾。

このような「万能のブルドーザー」の駆動力には負けず嫌いの精神が息づいていることも本書からは明らかである⁽⁴⁾。アメリカでの博士候補生になるための語学試験では、日本人留学生はたいてい日本語で受けるのに、フランス語で受けたのは「しゃくだった」からだと言う(106)。東大でも、同じ時期に岡義達のゼミにいた田中善一郎より、自分の方が「ブリリアントなプレゼンテーションをし」「シャープな」質問をしていたので(50)、「岡さんは僕を後継者にと思っていたのに、帰ってみたら田中善一郎がなっていた」(115)と、自負心の強さを示す。東北大学での教授昇任では、同年生まれの青井秀夫に比べて数年遅れたことについて、教授でドイツに行けたらぐっと待遇が好転したはずなのにと悔しがる(198)⁽⁵⁾。

また、自分の論を認めてくれなかった先行研究者や編集者に対しては、後に「勝った」とか「ざまあみやがれ」と思ったという感想が率直に語られている⁽⁶⁾。さらに言うならば、1994年の選挙制度改革の後、この改革には大きな効果がないとする共同研究をいち早く公刊したのも、当時の改革論を主導した政治学

「大嶽政治学」とは何であったのか？

者たちへの反発心の現れであったと思われる (254)。

2. 「大嶽政治学」のバックグラウンド

本書を見ると、この「大嶽政治学」の達成には、当人の超人的な資質に加え、それを支える重要なバックグラウンドがあったことも窺える。

本人が語るところからすると、第一は、演劇や文学の素養であり、第二は、音楽などの芸術を愛する心であろう。大嶽は自分自身の分析が物語的なものであると位置づけ⁽⁷⁾、自分の研究は文学的な素養がなければできなかったはずとしている⁽⁸⁾。熱心な音楽愛好家であることがその政治学にどのように反映されているかについては、確かなことは言いにくいだが、あふれ続けるその文章力は、音楽の調べと共に大嶽から流れ出しているのではないかと想像することは許されよう⁽⁹⁾。

第三は、当時の日本政治学界における左翼的な言説や人間関係に対する距離感である。猪木正道のゼミに所属しながらゼミ選出の自治委員で新左翼の連中と付き合いもできたため猪木に嫌われたと思って京大の大学院に進むことはなかった、また京大の教員たちはみんな保守派だったので東大に進んだと述べているくせに (39)、東大に移れば移ったで全共闘からも距離を置いて (66) 教員のスパイという非難を受けたりしている (71)。本人は「ちょっと変わったニューレフトの一人」であったと自称しているが (i)、むしろ、特定の党派に属することをせず、いずれからもつかず離れずの絶妙な立場を保ち続けていたように見える。このことは大嶽における政治からの距離感・デタッチメントという特徴を現しているようにも思われる⁽¹⁰⁾。

第四は、大学内行政への不関与である⁽¹¹⁾。大嶽は東北大学で二期評議員を務めたほかには勤務する大学での役職に一切就かず研究に専念し、「無冠の帝王」であったと自ら語る (iii)⁽¹²⁾。学内行政によって疲弊している今日の多くの研究者たちの中には羨望の目を向ける者もあろう⁽¹³⁾。

「大嶽政治学」とは何であったのか？

第五は、妻の献身的な協力である。彼女は大学卒業後すぐに大嶽と結婚し、それ以降、外国にまで常に彼に付き添って、家事を担うだけでなく、夫の研究生活上の人間関係の構築に協力していることが本書のあちこちで示されている。「大嶽政治学」の成立への洋子夫人の寄与の大きさは、計り知れないところがある。

Ⅱ. 語られぬもの

1. 「東大法学部関係者」とは誰なのか？

大嶽は自身の研究について「固有名詞」がないと分かった気になれないと語っている (3)。しかし、本書での回想では固有名詞で示されていないところがある。それは「東大法学部関係者」である。大嶽の研究やレヴァイアサングループでの活動について、「東大法学部関係者」から批判的な対応がなされたらしいことが示唆されているが、そこには固有名詞がない (194)。

戦後政治学史に関心のある人間として最も気になるのは、丸山眞男との間にいかなるやりとりがあったのか、ということである。丸山については、ゼミで伊藤東涯の講読をやらされて閉口したという感想が語られているだけで、そこで丸山がいかなる指導を行なったのか、そこで大嶽が何を学んだのか（或いは、いかなる反感を持ったのか）についての言及はない (59)⁽¹⁴⁾。

丸山自身の回想によれば、東大紛争の時、佐藤慎一、渡辺浩、宮村治雄らが組織した有志連絡会議には、丸山のゼミの学生が多かったという⁽¹⁵⁾。彼らとともに大嶽は丸山ゼミに参加していたはずである。大嶽は丸山に連絡を取るような関係にはいなかったのだろうか。ちなみに、後の丸山には、レヴァイアサングループへの批判的なコメントがある⁽¹⁶⁾。

坂本義和については、親しかった (56)、また、大学院在学中は坂本を通じ
(2022)

「大嶽政治学」とは何であったのか？

て院生の要求を大学側に伝えた(70)、というように言及しているが、もともと坂本思想に共感していたという割には、例えば、防衛問題に関して坂本から何を学んだのか、あるいは、それに対してどのような批判を抱いたのか、そこからどのような大嶽なりの「防衛構想」を思うようになったのか、などが語られることはない。

福田歓一についても、大学院入試の面接での問答(46)と、大学院ゼミでルソーを読んだ(93)というところで言及されるだけで、その政治思想的立場については何ら語られていない。

また、東大法学部で西洋政治史担当であった篠原一には、コーポラティズムの共同研究や多元主義者ダールの理論枠組みを用いた『ヨーロッパの政治』など、日本における比較政治研究の重要な試みがあるのに、それらについて一言も触れていないのは不自然に思える。

ほぼ同年で同じ時期に東大の研究室に所属していたはずの佐々木毅も、当時の思い出の中にはまったく登場しない。南原繁以来の政治学史講座を引き継いだ佐々木は、80年代中盤以降同時代日本政治に向けて積極的に発言するようになる。東大では、東工大に転出した田中善一郎に代わって(かつて岡義達が担当していたところの)政治学原論まで講じつつ、90年代以降の政治改革議論にも積極的に関わることになる彼を、大嶽がどう見ていたかは極めて興味深いのであるが、コメントはない。

そのほか、東大法学部出身者では、松下圭一が大嶽と岩波書店との関係を取り持とうとしたとか(158-159)、レヴァイアサンの発刊に際して木鐸社に口をきいてくれたらしいという記述があるが(190)、松下にとって重要であったはずの政治的実践・政治的立場については大嶽は口を閉ざしている。

東大法学部の、そして東大法学部出身の政治学者との対抗関係については、有賀弘とけんかになった(68)、神島二郎に怒られた(208)、宮田光雄と議論になった(138)というくらいで、そのメインストリームを占める学者たちにつ

いては、固有名詞を伴った内容のある回想が意外に乏しいのである。

2. 「先生」の不在

語られていないものという点からさらに考えてみると、本書には、学者の回想であるのにもかかわらず、語り手の学問上の師が誰であるか示されていないという、まことに奇妙な特徴があることに気づかざるを得ない。先行研究者たちからいかなる継承があったのかとは、科学史におけるパラダイムを考える上では必須の着眼点であるが、本書にはそのための手がかりは語られていない。

手始めに、呼称に着目してみよう。回想中、大嶽が「先生」づけで呼ぶのは、京都大学での勝田吉太郎 (25, 31)、野口名隆 (27)、猪木正道 (30) 福島徳寿郎 (40)、東大での岡義達 (46, 47, 48, 49, 50, 52, 62)、京極純一 (57, 136)、関寛治 (58)、岩永健吉郎 (60)、坂本義和 (70)、東北大学では、同僚だった小嶋和司 (12)、宮田光雄 (138)、学長の石田名香雄 (6)、その他、サントリー学芸賞に推薦したらしい永井陽之助 (136)、論争をした山口定 (207)、日本政治学会の沖縄大会のプログラムを見ながら蒲島郁夫 (214) だけである。ただし、一箇所では「先生」で呼んでいても、それ以外のすべての場所では「さん」づけになっている例も多い。猪木、坂本、山口や蒲島である。二箇所で「先生」と呼ばれている京極も、それ以外の箇所ではすべて「さん」づけである。最も「先生」づけの多い岡にしても、それ以上の数で「さん」で呼ばれる。

このうち制度上大嶽の指導教授は岡であるが、岡の研究及び研究指導では「役に立たない」「危ない」と考えて留学するに至ったとされており (54 - 55)、大嶽の学問形成に岡の与えた影響は大きいものではないことが示唆されている。大嶽は、以前の著作では、岡が昼食を共にしながら同時代の政治家の名前をあげて論ずるのを聞いて、「時事的トピックがアカデミックな政治学のテーマたりうることを知ったのは私にとって大きな驚きであった」と書いていたが⁽¹⁷⁾、本書では、岡がそのように政治家の名を出してもそれ自体を彼が自分で分析す

るつもりはなかっただろうとしている（49）。ここからすると、大嶽が同時代政治研究の手がかりを得たのはアメリカ留学後ということになるはずである（61）。

実際、シカゴに行って現実のシカゴ政治のなかで研究する人たち、「先生方」（固有名詞はない）を見て、「研究はこういうふうにやらなければならない」と思ったと言い（109）、また、キャブランのゼミでは、アメリカの事件をとりあげて一つずつ論文を書くよう指導を受けたとも述べる（110）。ところが、アメリカ留学期間でも、ポール・ピーターソンをはじめ、セオドア・ロウイ⁽¹⁸⁾、フィリップ・シュミッター、クロプシー、デイヴィッド・イーストン、シドニー・ヴァーバ、ケネス・プレウィットなど皆呼び捨てである。ここではアメリカ式の習慣で口にしているようでもあるが、なぜか、タン・ツォウとテツオ・ナジタのみ、「さん」づけになっている⁽¹⁹⁾。

何十年前も前の指導教員を皆「先生」で呼び続けなければならぬとも思わぬし、また、日本の大学や学界での同僚を皆「先生」と呼ぶ慣行もあまり格好の良いものとは思えないが、大嶽の呼び方には、平等主義とカリベラリズムというような原則のみによるものではない、なにか他の意図があるようにも感じられるのである⁽²⁰⁾。

対比的に考えるために、丸山眞男の例をあげよう。政治学者という存在としての丸山を成り立たせる最も根本的な契機となったのが南原繁であることを疑う者はいない。丸山は、南原の政治思想・政治理解がいかなるものであったかを語り、それに対して自己の政治思想・政治理解をどのように構築していたかとしたかを語る⁽²¹⁾。丸山本人によると、当初は批判者として門下に加わり、次第次第にその影響を受け、自分自身が変わっていったと言う⁽²²⁾。そのように回顧するとき、丸山が南原を呼ぶのは常に深い敬意を込めて南原「先生」である⁽²³⁾。

研究者が研究者としての自己を形成しようとするとき、人との出会いをきっかけに自分が変わったという話自体はよくあるものである。これは、先人の思

想に影響を受けるというような深甚なことばかりではない。何も知らなかったところから多少は何かを知るような自分への変化ということは誰にでもある。「学ぶ」という以上、最小限そのような変化はあるはずである。その変化は、もちろん、書物、文献を読むことによって得られることもある。しかし、大学での専門研究者になろうとする者は通常、大学・大学院での教育制度に参入することで、そのような変化を経験する。大学・大学院という制度を経由しないと、その制度の中で専門家としての知識と職とを得ることができにくいからである。そこに媒介者としての指導教員という存在の意味がある。それ故、研究者ならたいい自分を教えてくれた教師をまず回想するものである。

ところが大嶽の回想には、このような変化の記述がない。大嶽にとって重要であったはずのシカゴ大学在籍時についても、指導教員であったピーターソンとの間でのやりとりは幾つも明かされてはいるものの、彼から教わったものが何かあるのかは語られてはいない⁽²⁴⁾。自分はピーターソンにこう語ったというような逸話ばかりである（113）。

大嶽は指導教授との関係は政治的な関係であると最初の著作のあとがきで述べ、本書でも院生時代、岡との政治的なやりとりを楽しんだ、指導教官とは対等であることを心がけていたと語る（50）。そのような関係は丸山と南原との間には存在しない⁽²⁵⁾。逆に言えば、大嶽の回想では、丸山にとっての南原のような、すなわち、その理論を受けとめそれを乗り越えようとした先行研究者が示されることがない。本書の冒頭でインタヴューアーは「このプロジェクトでは、大嶽先生が政治分析手法をどのように構築されていたのか、ご自身の反省と連動させてうかがっていきたいと思います」と述べ、この聞き取りの狙いを明らかにしているのであるが（1）、大嶽の回想には、研究者としてのあり方、或いは研究者としての方法を、誰か「先生」から教わったとする記述がないのである。

言い換えるならば、この回想からは研究者としての大嶽の成長の軌跡が見え

ないという印象を受ける。本書を読むと、大嶽は大学入学時点で（或いは、既に大学への進学を考える高校生の時点で）完成された人格で、その自分の関心にあわせて大学に並んでいる面白いメニューをピックアップして自己流で精力的に取り込んでいっただけであるというようにも感じられるのである⁽²⁶⁾。これは冷静で早熟な人格として大嶽があったと理解することももちろん可能なのであるが、そうであるならば、今度は別種の疑問が生まれるだろう。大嶽は何をやりたくて政治学なんぞに取り組んだのか、という問いである。

丸山の場合であれば、その学問は、南原が築きあげた西洋政治学史を学んでそれを継承・発展させることであったろうし、また、南原の命に従って日本政治思想史という新たな学問体系を構築することであったろう。そして、その学問は、根源的には、日本がどうあるべきかという問題関心の上に成り立っている。

この点については、ひとまず大嶽が自らにオリジナルなものとして語るその政治学観から考えておきたい。大嶽は、政治学は応用の学、臨床の学だと述べている（241-243）。このような考え方に従えば、政治学という学問では、眼前にある政治事象をいかに分析できるかが問われ、その分析に有効な方法が様々な研究領域から動員され応用・導入されることになる。当該事象の分析に有効であるか否かで、どの理論を採るべきかが決定されるだけである。

政治学がこのようなものであると考えるならば、先行研究史・学説史の考察は、それ自体では研究課題の設定には第一次的には役に立たないことになる。こう考えてみることで、大嶽による先行研究者や指導教授への言及の特徴が理解できるのかもしれない。臨床の学である「大嶽政治学」の成り立ちにとっては、目の前の対象への臨床的対応こそが必要なのであって、先行研究が考察の目標となることがない。それ故、先行研究者たちは、継承したり乗り越えたりすべき対象とはならないのである。この政治学的経歴の回想において、先行研究者たちに対する人格的な敬意があまり示されないのは、このような大嶽独自の政治学観が関係しているようにも思われる。

「大嶽政治学」とは何であったのか？

しかし、このように政治学を考えるとしても、そもそも、その研究課題はどのように選ばれるのかという問いは残る。医学であれば、発病した人間を救うという目的があってこそその臨床である。しかし、大嶽の政治学における臨床では、何が救われるべき対象なのか、またその対象は何から救われるべきものなのか、が自明のものとはなっていない。このことは「大嶽政治学」に何か体系性を読みとることができるのか、という問いにも連なってくるので、章を改めて検討しよう。

Ⅲ. 「ジャーナリスティック・アカデミシャン」としての大嶽秀夫

1. ジャーナリスティックな姿勢

大嶽が政治学は臨床的なものであるとしているところからすると、彼がどうして日本政治学界の中で、多元主義、新自由主義、ポピュリズム、フェミニズムといった論点をいち早く取り込むことができたのか、また、日独比較、日仏比較の先駆者になり得たのか、という秘密も、別の角度から分かってくるように思われる。すなわち、大嶽が何らかの（理論的）体系性より臨床性を重視した結果、その時々において最も重要な（或いは、その後最も重要になってくるであろうと予想される）論点に着目して、それにふさわしい分析枠組みを柔軟に模索することができたのではないかという推測ができるのである。

大嶽は、自分に面白ければ、「それは他の人にも面白いはず」と語っている（287）。もちろん、それが卓説した語学力を駆使した、膨大な文献の網羅的読破に裏打ちされていることは言うまでもない。しかし、このような主題設定方法それ自体は、優れてジャーナリスティックなものであると言えるだろう。或いは、ジャーナリスティックなセンスが、「大嶽政治学」の基底にあると思われる⁽²⁷⁾。

「大嶽政治学」とは何であったのか？

ここから、大嶽の思考方法を考えるなら、その特徴は、日本政治に現れた問題を、日本政治固有の問題とは直ちには考えないというところに認められるであろう。彼は、日本政治に特有の問題性を告発するというような意識を持たない。すなわち、彼は、日本という事例を特別視せず、日本固有の事情に問題の原因を求めない。このような思考方法は、先行世代の政治学者と大きく異なるところで、彼の議論を国家間比較に開かれやすいものとしていることは確かだろう。

では、この大嶽は、無数にある社会現象のうち何を面白いと思い、何をあえて研究対象にしていたのだろうか。その対象選択の基準になっていたのは何なのだろうか。彼にとって、ジャーナリスティックに接近しようとしたテーマは何であったと総括できるのだろうか。それは、あえて言うならば、(当時の)政治学界それ自体ではないかと、次に述べたい。

2. 「大嶽政治学」の新しさ

先に、大嶽秀夫を含むレヴァイアサングループの擡頭は日本政治学界におけるパラダイムシフトを示しているのではないか、という観測を述べた。では、以上のように概観してきた「大嶽政治学」の特徴は、このパラダイムシフトにどのように寄与したと考えられるだろうか。

研究方法についてみると、大嶽が導入した手法、例えば、政策過程の実像を描くのに、新聞やインタビューを多用するというやり方は、今日の同時代日本政治研究では何の疑いもなく広く用いられるようになっている⁽²⁸⁾。このような手法の採用が、1990年代以降多くの優れた同時代政治研究を可能にしたことは疑いがなく、先駆者大嶽の貢献は大きい⁽²⁹⁾。とはいえ、科学的に見た場合には、「大嶽政治学」がそれ以前の政治学から方法的に断絶しているとも言いがたいところがある⁽³⁰⁾。

私自身は、思惟方法の特徴や後継者の養成という点から見れば、日本政治研

「大嶽政治学」とは何であったのか？

究の制度化すなわちパラダイム形成（政治学の通常科学化）にとって重要な役割を果たしたのは、大嶽よりは村松岐夫でなかったかと指摘したこともある⁽³¹⁾。大嶽の言う臨床の学としての政治学という主張は、それとは逆に学問の制度化を抑制する要素を内在させるものだからである。しかし、大嶽の登場が日本政治学の劇的変化を象徴するものであったことも疑い得ないところなのである⁽³²⁾。科学史的にはそれはどう考えればよいのであろうか。

ここでは、「大嶽政治学」が否定・更新したのは、先行世代の研究業績自体ではなかったということに注意したい。大嶽が破壊したのは、1970年代中葉まで東大法学部にあった常識、すなわち、同時代政治はアカデミックな研究課題にはならないという常識である⁽³³⁾。そして、それ以上にここで注目すべきことは、その常識と共にその常識の裏側にあったものである。それは、同時代政治研究をアカデミズムから排除しつつ（特に東大法学部系の政治学者たちによって）維持されてきた同時代政治に関する特有の「思考パターン」である。大嶽は政治学者たちの常識とともに、その「思考パターン」をも破壊したのではないか。

大嶽によると、「当時の東大政治学的には、体制というよりも、支配層と大衆の対立みたいなイメージが強くて、そういう視野で政治を語る。そうになると支配層内部の対立なんて矮小であって、そんなことを分析したってしょうがないというスタンスが基本でした」（126）。これは時代的に共有された「イメージ」であって、それ自体が何らかの具体的な研究の成果によるものではない。だが、その「支配層」なるものについては、ある定型的な思考がとられていた。すなわち、そのような「支配層」が想定される日本政治社会では、政治への批判的な言説を保ち続けなければ、日本は再び人権の抑圧された国家となり、再び戦争を引き起こすことになるかもしれないという考え方である⁽³⁴⁾。それは「権力に取扱注意の赤札を貼る」ことが政治学の使命であるという有名な丸山の言説に代表されるような政治学者としての責任意識にもとづくものであった⁽³⁵⁾。

大嶽には丸山らのような責任意識は見られない。大嶽がジャーナリスティッ

クなセンスによって研究主題に選んでいくのは、この「思考パターン」を用いて片づけられることの多い政策領域であった。大企業の権力、防衛政策、戦後復興、ポピュリズム等等。大嶽はアカデミックな方法を用いてこれらの論点を腑分けしていくことで、それまでの日本の言論人（政治学者を含む）が安易に繰りかえしてきた「思考パターン」を、（結果的に？）粉砕していくことになったのである。大嶽の研究は、当時の政治学界にあった特有の「思考パターン」の存在を浮かび上がらせ、実証的根拠をもってその「思考パターン」の射程を検証するところに特徴があったと言えるのではなかろうか。

大嶽が破壊した「思考パターン」自体は、当時の主要ジャーナリズムでも見られる常識のようなものであった。大嶽は、このような既存の知的フレームワークを疑い、その検証にかかる。これは学界というものに対する果敢なジャーナリストの姿勢そのものであろう。しかも彼がこれを研究成果として提示するとき、何かある特定の先行研究批判としては立論しない。また、その記述のしかたは、後続世代が独立変数と従属変数の明確化を重視するのに比べれば、先行世代の人文主義的なやり方に近い⁽³⁶⁾。

彼が本書において名をあげている多くの先行研究者たちは、自分に学問を教えてくれた師、先生という面であり、大嶽のジャーナリスティックな関心の対象になる人物群という面で言及されたと言えるように思える。ジャーナリスティックな記述は視点の変化を嫌う。本書で大嶽が彼らをあえて「先生」とは呼ばないのは、自らの変化・成長という要因を排除して研究者たちを客観的な観察の対象として示すためだったのではないだろうか。

このようにして学問の世界をジャーナリスティックなまなざしで眺め大嶽が行なった戦後知識人的常識と「思考パターン」との破壊、これこそが戦後政治学史における新しい政治科学の出立、パラダイムシフトを引き起こすものになったのではないかと考えられる。

Ⅳ. ポスト「大嶽政治学」の可能性

1. 引き継がれない「大嶽政治学」？

本書では大嶽が自己の政治学が引き継がれないと嘆いているのが目につく。特に日独比較、日仏比較、フェミニズム研究といった領域である(261)。もし大嶽の成果が引き継がれていないとするならば、大嶽を契機として新しいパラダイムが成立したという見立ては否定されることになる。そこで、「大嶽政治学」に対してはどのような継承の試みがなされてきたのかを、検討してみることにする。

大嶽以後、日本の政治学において、様々な政策領域について多数の実証的研究が生まれていることは事実であろう。大嶽自身も『日本の防衛と国内政治』の公刊によって、「日本政治の実証研究、政策決定過程についてはいちおうやり終えた感じがして、ちょっと傲慢な考えですがあとは若手が僕に続けばいいだろう」と思ったと語っている(163)。ここで大嶽は後進に対して範型を提示したことには自覚的であったということであり、これを通常科学化の端緒と見なすことはできるであろう。ただし、彼はそのような後継世代の業績にはあまり関心がないようである。例えば、大嶽の『日本型ポピュリズム』以後活発に展開されるようになったポピュリズム研究については、「近年の政治学でポピュリズム論が盛んですが、正直に言うところのものはフォローしていません。私のポピュリズム研究で論争になったこともないし、私の学会発表に対して、特に批判も出ませんでしたから」と、冷淡である(270)。彼が引き継いでもらいたいと考える成果は、こういう方向のものではないらしい。

既に述べたように、大嶽の研究はもともと、自身の優れたジャーナリスティックなセンスによる問題設定の上でなされているものであるから、そのセンスが

「大嶽政治学」とは何であったのか？

共有されていなければ後継世代には引き継ぎにくい構成になっている（と、後継世代として、まず言っておきたい）。もし「大嶽政治学」を先行研究として引き継ぎ発展させていこうとするなら、一つのやり方としては、大嶽が扱ったのと同じ事例について大嶽が入手できなかった史資料を収集して再考察を図るという方途がある。だがそういう研究は政治学研究ではなくて政治史研究のカテゴリーに属するものとなる。それでは「大嶽政治学」を引き継いだことにはならないだろう。

政治学のカテゴリーで引き継ごうとするのなら、大嶽の研究の理論的射程を確認してそこから刷新の途を探るというやり方にならざるを得まい。だが、大嶽自身の研究業績にはそのような理論的位置づけがしにくいという特徴がある（それは安易な単純化を許さない周到さをもっているという点で、丸山真男の同時代政治論に通じるものがあると言えるかもしれない）。大嶽が軽やかに新たな論点へのチャレンジを重ねていくのは、彼自身にも自己の研究を蓄積・体系化し発展させていこうという発想が稀薄であることを示しているようにも思われる。

それに対して、（大嶽だけでなく、当人たちも認めないかも知れないが）彼の高弟畠山弘文や新川敏光がそれぞれ独自の形ではありながら、国家論的研究への可能性を模索し続けてきたように見えるのは、「大嶽政治学」の更新・刷新への回路が、国家論の方向にあることを示しているのではないか⁽³⁷⁾。この方向の可能性については、大嶽自身は否定的であるようにも思える。そこで、最後に「大嶽政治学」にとっての国家論について考えてみたい。

2. 権力と影響力をめぐる

ところで（と書いて話題を展開するのは大嶽流である）、私が本書の中で一番驚いたのは、権力の「対概念」は「役割」であると述べているところである（128）。

博士論文の口頭試問で、「京極さんだったかな」「権力というものの対概念は何か」と聞かれたので、私は「役割」と答えた。権力関係は上下関係ですが、

機能的協力関係はある意味で役割分担です。役割分担によって政策決定がスムーズに行われているケースを想定すると、そこに必ずしも権力関係は存在しない」(128)。

本書では、大嶽本人も十分検討できなかった概念であると留保して触れているとおり、この「役割」という概念の定義は明らかにされていない。大嶽自身はライト・ミルズに影響されたと語っているが、ミードやパーソンズらによってもいろいろと検討されている「役割」概念について、アメリカで社会科学を学んだ大嶽が知らなかったとは考えられまい。だが、ここでは、述べられている文脈から推測して感想を記しておきたい。

私が驚いたのは、例えば女性の家事労働について、男女の役割分担の名の下にその権力的関係が正当化されてきたことは、フェミニストならずとも、あまりに明らかなことであり、フェミニズムを最初に日本の政治学に持ち込んだ男性政治学者であると自負する大嶽が、今このように「役割」なるものを論ずるとはいったいどういうつもりかと、首をかしげざるを得なかったからである⁽³⁸⁾。もちろん、ここでも「必ずしも」と慎重ではあるから、権力的な関係にある役割分担の存在も認めてはいるのだろう。しかし、「役割」を権力論的に捉えるのではなく、権力と役割とを「対」になると捉える発想自体に大きな難があるように思われるのである⁽³⁹⁾。

大嶽が「役割」の例としてここで言及している「機能的協力関係」とは、政策決定過程において、直接的な影響力行使がなくても、官庁がその所轄の関係団体と結果的に共同歩調をとることになる事態を指している。これは、例えば欠陥車問題における企業と運輸省・通産省との間の問題として検討されている⁽⁴⁰⁾

政策過程の実証研究のレベルでは、影響力関係にかかわらずに国家機関と国内ビジネスとの間に協力関係が成立していることを分析できる。それは決定過程の外部の者（例えば、消費者）には一見一体となって動いているように映る

「大嶽政治学」とは何であったのか？

ものでありながら、相互に鋭い緊張を孕んだ「多元的な」関係が隠れていることを鮮やかに示す。しかし、これをよりマクロなレベルから考察するなら、それが権力的関係と「対」になっていると言えるほど、問題は単純ではない。ここで見られる大嶽の立論の難点は、簡単に言えば、国家論的観点の欠落として指摘できよう。

例えば、新川敏光は既に大学院生時代のその権力論研究において、直接的影響力、間接的影響力から進んで、システム権力など、より構造的な権力への洞察を試みている⁽⁴¹⁾。そして、その後「権力リソース動員モデル」を採用して国家比較の議論を行なおうとしてきた。他方、畠山弘文も、ストリートレベルのビューロクラシー研究を終えた後、国民を動員する「見えざる手」としての国家の及ぼす力を可視化しようと努めている⁽⁴²⁾。二人の試みは「大嶽政治学」に欠けていたものを明らかにしてさらに議論を深化させようという模索として位置づけることができるように思われる。「役割」と言われているところに潜んでいる権力的契機掘り起こしこそが彼らの課題であったとも言い換えることができるのではなかろうか。それに対して、大嶽自身には、その方向で研究を深化・体系化しようという発想は、本書に至っても現れていないようである。

3. 国家論なき政治学は可能なのか？

国家論的な観点が欠落しているために、大嶽は本書の中で「とんちんかん」な議論を展開していると見えるところがある⁽⁴³⁾。それは、戦争責任をめぐる論議である。

大嶽は今の若い世代には戦争責任はない、という主張を、親子の比喻を用いて述べている。

「僕が「ナチズムをいろいろ言うけれども、ナチズムの謝罪を要求するのはどうだろう。やったのは今の世代ではないから、厳密には今の若い人たちにそんな責任はないでしょう。父親のやったことに息子が責任を取れというのはお

かしいではないか」と議論をふっかけて、「心が痛むから」などなどと言われました」(238)。

「95年にドイツのヴァイツゼッカー前大統領が比叡山に来て話を聞いたときも、僕は彼に質問したのです。「なぜ今の世代のドイツ人が、過去のナチズムの戦争犯罪について反省しなければいけないのか」と」(239 - 240)。

従軍慰安婦問題のような日韓関係の過去についても「「いったい、父親がやったことの罪が子どもにあるのか」と展開しました。「被害者には気の毒だが、日本の若者にそういう責任を追及するのは見当違いであり、困るのだ」と言ったわけです。日本政府に日本人の責任を追及することは、日本国民一人ひとりにお前は日本人だから責任があるというと同じなんですね。「日本の若者も有責だというのはアンフェアだということです」(272)。

このような発言は、(好意的に見れば) 国家をリバタリアンの捉え直すことを促すものとも言えそうではある。大嶽は、議論誘発のためにあえて挑発的な発言を行なうことも多く、この発言にもそのような気配は感じられる⁽⁴⁴⁾。しかし、ここに見られるような繰り返しに対しては、言わずもがなと思われる程度の反論でもあえてしておくべきであろう。以下に批判する。

親が罪を犯したとしてもその子どもまで反省を強いられるのはおかしいではないか、という言い分は、近代の「市民社会」の法秩序の下では疑う余地のない正論である⁽⁴⁵⁾。しかし、戦争責任の議論をこのような比喻で論じるのは子供じみている⁽⁴⁶⁾。誤っているとさえ言える。戦争をするのは国家であって、個人ではないからである。

もし、この論点を親子の比喻で考えようとするならば、親の財産を相続しようとする子どもは負債のみ放棄することは許されまい、という比喻になるだろう(この比喻を用いるなら、相続放棄とは国籍放棄にあたるだろう)。むしろ比喻はあくまでも比喻に過ぎず、それに拘泥するのは学問的には建設的とは思えない。とはいえ、ここでは、大嶽の一見もっともらしい主張は、自覚してやっている

「大嶽政治学」とは何であったのか？

なら欺瞞であり、そうでなければ国家という主題への理解がお粗末に過ぎるということだけは言わざるを得ない⁽⁴⁷⁾。

大嶽は今、大日本帝国の遺産について既に原稿を書き上げ（292－294）、そして天皇制とイタリアファシズムの比較研究を進めているという（ii-iii）。そこで、大嶽がいかなる国家観にたどりついたのか、私としては強い興味を引かれるところである。

結び

大嶽は、1978年に東北大学に赴任して早々宮田光雄と論争したという。「僕は「天皇制なんてもう、今、無害ですよ」と言ったのですが、彼は「とんでもない。日本のデモクラシーを破壊する力はまだ天皇制にある」と言うので議論になった」（138）⁽⁴⁸⁾。1930年代のような自由の抑圧された日本社会再来への危惧は、丸山が1995年のオウム真理教事件に関しても語っているところであり、戦後知識人に共通の問題意識・危機意識であると言えよう⁽⁴⁹⁾。「大嶽政治学」はこのような戦後知識人の問題意識・「思考パターン」を過去のものとした。しかし、今日、天皇制は政治的に無害（或いは、無意味）になっていると本当に断じうるのだろうか。

例えば、東日本大震災やコロナ禍においては、天皇及び天皇家のメンバーが国民を慰撫する能力が期待され、また発揮されたのではないか（内親王の結婚問題への国民的関心の高さも、このような皇室への期待の高さの裏返しとも見える）。この機能は、国民が選ぶ政治的リーダー、例えば総理大臣によって当然に代替可能なものなのだろうか。或いは、日本における独立的自営業者・中小企業者にある保守的バイアスは、天皇を頂点とする正統性の権威づけの体系とは無関係だと言えるのだろうか⁽⁵⁰⁾。

こういった論点への関心は、戦前回帰への危機感とは（さしあたりは）別に、

近代国家の形成及びその再生産過程についての政治学上の理論的な関心として意味を持ちうると私には思える。その考察のためには、歴史的パースペクティブをもったグローバルな比較研究が必要になるだろう。それは対象地域にあわせてテーマを選ぶという比較研究ではなくて、研究しようというテーマにあわせて対象地域を選ぶという比較研究である。このような比較研究の主題設定方法は、日本政治学では、まさに大嶽が先鞭をつけたものである。

大嶽自身は後継世代による理論先行の比較研究には抵抗があるようである(183)。彼には、固有名詞抜きで理論に依存することへの警戒感が常にあるのかもしれない(これが彼独自の「下のところ」からの現場感覚なのかもしれない)。しかし、先行研究の総括は理論的にならざるを得ないし、その作業をせずには学問の継承はあり得ない。今日の世界を見れば、国家の存在と機能とを当然の与件として、一国内政治を一つの閉じたシステムと見なす研究はとうてい成り立たなくなっている。それ故、国家の理論的再考察がなされないままでの国内政治研究の射程はごく限られた範囲にとどまらざるを得ないだろう。大嶽の達成した諸業績は、国家と政策過程との理論的再定位のために有益な手がかりを豊かに蔵していると思える。それらには、大嶽本人の意図とは関係なく、臨床的に再利用できるものも多数あるはずである。私はこの方向にこそ大嶽以後の新しい政治学を発展させる道があるのではないかと考えている。

※本稿は、酒井泰斗氏が世話人を務める日米政治科学史茶話会での報告のために提出した原稿をもとにする。コメントを下さった酒井大輔氏をはじめとするメンバーの各位には、ここで改めて御礼申し上げる。

註

- (1) 例えば、本書編者酒井大輔の次の二つの論文を参照。「日本政治学史の二つの転換—政治学教科書の引用分析の試み」『年報政治学』68巻2号、2017年、「戦後政治学の諸潮流—計量書誌学的分析 1945～1989」『政治思想研究』21号、2021年。
- (2) ただし、1980年代の中頃、私は、人が今まで言っていないこと、新しいことを

「大嶽政治学」とは何であったのか？

最初に言うのは怖いものだよ、と大嶽が語るのを聞いている。

- (3) 私は、1990年代の中葉に、大嶽自身の口から、自分はなんでこんなに頑張るんだろうかと自分でも思うんだが、それは、(義務とか名誉とかお金のためではなくて)他の信頼する研究者たちに見られていると思うからだろうと思う、と聞いたことがある(固有名詞は出なかった)。
- (4) 大嶽は巨大ブルドーザーのようで、その通った後には何も残らない、とは、1980年代に大嶽の高弟から聞かされた比喩である。
- (5) 本書の註を補足すると、大嶽が「僕と同じ年」という青井は、1943年生まれだが学年は1年上で、1965年京大法学部卒、1970年に京大法学研究科博士課程を退学して東北大学法学部に着任、在職9年で教授に昇任し、1982-84年に大嶽同様フンボルト財団の奨学金を得て、ドイツ・ゲッティンゲン大学に留学している。
- (6) 「勝った」とは、一つは指導教授の岡との他愛もないやりとりに関して(50)、もう一つは『レヴァイアサン』に対抗して「東大法学部関係者」が『ビヒモス』なる新たな雑誌計画を進めていたが結局出なかったというときに「得意顔」になってそう思ったとして語られている(194)。また、「「ざまあみやがれ」と溜飲を下げた」というのは、岩波書店の『世界』には拒絶された日本の軍需産業についての論文が、その後『朝日ジャーナル』に掲載され、好評を博した際のことである(158)。
- (7) 大嶽は自分の方法論を「ナラティヴ・アナリシスというものです」と呼んでいる(2)。大嶽がこのように自分の方法論的立場を宣明したのは、ここが初めてのように思われる。ただし、narrative analysisについては、90年代から各分野で教科書・ハンドブックも出ており、政治学の分野でも narrative policy analysis や analytic narratives と題された本は幾つもあるが、大嶽の方法はこれらとどの程度共通のものであるかは直ちには明らかではない。大嶽の方法は彼が独自に生み出したもののように思える。
- (8) 「僕はどうもドラマチックに話を書く、ドラマタイズする癖がある」とも語る(228)
- (9) ちなみに、戦後政治学の巨頭丸山眞男が音楽愛好家であったこともよく知られている。彼が譜面を確認しながらレコードを鑑賞していたことは、丸山文庫に残された膨大な楽譜類からも明らかである。政治学なんかより下手なピアノを弾いている方がよほど楽しいとは丸山本人が語っていることだが、大嶽にとってのサクソも、そうなのであろうか。

また、丸山も演劇には大きな関心を持っていた。

- (10) この点については、根拠はないのであるが、中小企業経営者の家に生まれたという大嶽の出自が、このような独立精神とどこか関係があるのではないかという

「大嶽政治学」とは何であったのか？

想像をしたくなる。

日本の戦後社会科学史の中では、中小企業に正面から適切に光を当てた研究は多くはなく、マルクス主義的な図式による「没落するプチブル」という周辺的な位置づけの中におかれる例がふつうで、巨大資本や権力への従属的存在として見られてきた(丸山眞男が「擬似インテリゲンチヤ」と呼んだのは、この社会層のことである)。それに対して、大嶽が自民党の中に小さな政府を擁護する立場があることをいち早く指摘し得たのは、中小企業における強い独立自立志向を身近で知っていたからではないかという気がする(大嶽「鳩山・岸時代における「小さい政府」論」1991年)。

大嶽自身は、「ひょっとしたら、それ[ものを見るときに経済的な視点から見るという発想]は僕が商人の息子だから、商人的、実技的発想があるのかもしれませんが。東大の連中は上の方ばかり見ているけれども、もっと下のところを見なくては駄目だ、理念だけでは駄目という、そういうのはあると思います」と語っているところがある(38。□は渡部)。「上の方」すなわち東大卒の中央官庁の役人・学者・大手ジャーナリズムの世界からは、「下のところ」すなわち中小企業の実態は見えていないのではないかと、私は、私も中小企業者へのインタビュー調査を重ねて実感したところではある。

また、この「下のところ」から考えるという姿勢が、理論に対する大嶽の距離感にもつながっているように思える。

- (11) ただし、科研費などによる大規模研究を組織する学界のリーダー的研究者たちが、所属する大学でもそれなりの役職についていることが多いのは、勤務先で役職についていないと所属大学のリソースを共同研究に利用しにくいという事情によるものかもしれない、また、大規模資金の調達を期待させる者が学内で役職者に推されやすいというだけかもしれない。しかし、いずれにしても、大学等の組織行政負担を拒否しながら、多くの研究助成金を取得することに成功している(ように窺える)大嶽は、日本国内の大学人としてはかなり例外的な存在であつたろう。
- (12) 丸山眞男も評議員までは務めたが、学部長は辞退している。大嶽が丸山に做ったということもあるのだろうか。
- (13) 私も、ある会食の席で、大嶽の弟子の一人が、「どうやったら学内行政を逃れることができるのでしょうか」と半ば真顔で大嶽に質問するのを聞いたことがある。大嶽の答は、最初に大きな失敗をすることだ、というものであった。もちろん、大嶽自身にその実績があるのかどうかは、私に知るよしもない。
- (14) 丸山自身の回想によると、1963年頃から学生が変わってきたという印象があるという(大嶽の大学院進学は1967年)。「ゼミに出てきて、ただはしゃいでいる、面白がっているという感じなんだな。何かを学びにくるというのではない。でも成績はいいのです」(『定本丸山眞男回顧談』(下)岩波現代文庫、2016年、269頁。聞き取

「大嶽政治学」とは何であったのか？

りのこの部分が行なわれたのは1990年)。前年に一度大学院入試で大嶽を面接している丸山が、大嶽が大学院に入ってくることを知って、彼をアカデミズムの砥石にかけるために、あえて東涯講読をその年の大学院ゼミのテーマにしたという可能性は考えられないことだろうか。

(15) 『丸山眞男回顧談』(下) 235 頁。

(16) 『丸山眞男回顧談』の中でも、1990年の時点で、アメリカの政治学では政治的正義とは何かというような問題を繰り返し議論しているのに、「日本の政治学者はいったい何をしているのだ、政治過程論みたいなのばかりやっていて、という感じですね」と語っている(下、272頁)。レヴァイアサングループの仕事が、この「政治過程論みたいなの」のカテゴリーに入るだろうことは言うまでもない。

また丸山は、宮田光雄にあてた『平和のハトリヴァイアサン』(岩波書店、1988年5月刊)への礼状(1988年6月13日消印)の中に、「政治学者の中からもちかごろは平和や人権との緊張意識の見られない「レヴァイアサン」論者が出ていますね!」と記している(『丸山眞男書簡集 4』82-83頁。傍点は渡部)。このコメントは、宮田の同書のあとがきにある次の一節に対応したもので、レヴァイアサングループへの批判であることは明らかである。

『レヴァイアサン』の方は、ホッブズの政治的主著のタイトルに用いられている、国家権力の巨大さをあらわす象徴語のようにになっている。それは、絶対主義の時代のみでなく、まさに現代におけるファシズム国家、軍産複合体＝核権力国家にとってこそ、いっそうふさわしいシンボルとなってきたのではなかろうか。西ドイツのフランクフルト学派の系統に立つ政治学研究者たちが彼らの新しい社会科学雑誌に『リヴィアタン』と名付けたのは、もう10年以上も前のことだ。アメリカで発行されている新左翼雑誌にも『リヴァイアサン』という名前をもつものがある。フランス語圏では、ソヴィエト社会を分析対象とする『新レヴァイアサン』という雑誌も出ているようだ。最近では、わが国でも『レヴァイアサン』という季刊誌の発刊をみた。まさに『リヴァイアサン』花盛りといった具合である。もっとも、ホッブズの短いコメントにもかかわらず、この『リヴァイアサン』の原型が旧約聖書の神話的怪獣リヴィアタンに起源をもっていることは、あまり知られていないのではなかろうか(329-330頁。傍点は渡部。ちなみにこの時点では、大嶽と宮田は、まだ東北大学での同僚である)。

(17) 大嶽『アデナウアーと吉田茂』iv 頁。

(18) ロウイについて(だけ)は、その分配政治のモデルが日本にも適用できると思ったと述べ(88)、そのアイディアのプライオリティを認めている。ただし、これも、論文を読んでそう思った、とあり、直接会っての示唆(ないしは、指導)の結果ではないようである。

「大嶽政治学」とは何であったのか？

シュミッターのゼミでも、ロウイの政策アリーナ分類は因果関係のモデルではなくてパターン認識だと批判して、シュミッターを詰まらせたとあるから (92)、大嶽は特にロウイ (だけ) からは積極的な影響を受けたことを認めるのだろうか、とは思わせる。しかし、それでも、大嶽が明かすロウイとの直接的な関係は、学生時代ロウイの講義の録音を毎晩聞いていたのでその声だけはよく覚えていると、妻に語らせてロウイを笑わせたという後日談程度である。

- (19) この二人とは共同論文を執筆したとあるので、それだけ身近であったということなのだろうか (99)。
- (20) ちなみに 1990 年代を中心にする京都大学での私自身の記憶によると、村松岐夫門下生は、村松の同席しない場所でも、村松に言及する場合にはみな「村松先生」と呼んでいた。それに対して、大嶽門下では、同じような状況でも、「大嶽さん」と呼んでいることの方が多かったように思う。大嶽自身に倣ったものかもしれない。
- (21) 『丸山眞男回顧談』における数多い言及の中から無作為に近く抜き出すならば、例えば、「南原先生を通してうけたのは、歴史主義に対する反省でしょうね」(上, 210 頁)。「南原先生から受けたものは多様ですから、いまから想像するのは、ある困難を伴うし、あまり大きすぎて、影響という言葉を使えば、影響が大きすぎて一言では言えないのです」(上, 257 頁)。「自己とか個人というときに、個人のなかにあるエゴイスティックなものとそれを超克する要素とは、どう関係するのかというような問題は、南原先生を通じて教わったのです」(上, 354 頁)。
- (22) 「はじめは南原先生に批判的であって、批判者として弟子になった。批判者として弟子になって、それからだんだん傾倒していった。傾倒して弟子になって、だんだん離れていくのがふつうだけれど、自分の場合は逆で、はじめは超越的に先生の学問を見ていて、だんだん惹かれていった」(下, 39 頁)。
- (23) ただし、丸山は大学で直接教えた学生以外には自らを「先生」と呼ばせないと言っている (例えば、『丸山眞男話文集 2』295 頁)。また、彼はその指導学生のことを「弟子」と呼ぶこともなかったそうである。丸山のデモクラット志向の現れであるのか、それとも、岡が大嶽を「弟子」ではなく、「後輩」と呼んだ (52) のにも見られる対等意識 (それはおそらく特権的エリート集団内部に特有なものであろう) が、東大法学部大学院全体にあったということであろうか。

ちなみに大嶽自身は、古稀論集への寄稿者を「弟子たち」と呼んでいるが (289)、2000 年頃までの私自身の記憶では、かつては大嶽も自らの指導学生を「弟子」と呼ぶことはなかったような気がする。

- (24) シカゴ大学留学にあたって指導教授としてピーターソンの名前を出したのも、たまたま彼の論文を一本読んだことがあったからにすぎないという (77)。

「大嶽政治学」とは何であったのか？

- (25) ただし、これは、南原の政治的意向について、丸山が政治的に判断することがあったという可能性まで排除するものではない。
- (26) 大嶽は「僕がシカゴで出会った先生はみんなその後有名になります」と、まるで自分が優れた研究者を見出す目を持っていたかのように語るが (85)、彼らのどこが優れていたのか、大嶽自身が彼らから何を学んだのか、というように大嶽が語ることはない。
- (27) とはいえ、大嶽はジャーナリズムの世界で活躍して社会に影響を与えたアカデミシヤンの類には属さないだろう。TVのニュースショーにレギュラー出演した経験はもっていても、その書くものの第一次的な読者としては、あくまでも専門家、政治学者たちが想定されており、例えば、『新左翼の遺産』について「唐牛健太郎の奥さん」から手紙をもらって、「こんな本を彼女が読んでいるのかと驚いた」と語っている (280)。この点で、アカデミックな研究の成果 (のエスキス) を一般読者向けに発信することも重視していた丸山眞男とは、姿勢がだいぶ異なっている。丸山については、山口二郎が「アカデミック・ジャーナリスト」と評しているが、大嶽は反対に「ジャーナリスティック・アカデミシヤン」と呼べるのではないかと考える (山口「アカデミック・ジャーナリストとしての丸山眞男」『図書』1995年7月号)。
- (28) 村井良太は、御厨貴らが開拓したオーラル・ヒストリーという方法を、「東京学派」を特徴づけるものと見なしている (村井「摂取世代の見たオーラル・ヒストリー——東京学派四半世紀のヒストリー—デモクラシーと現代史の好循環を目指して」御厨貴編『オーラル・ヒストリー—何ができるか——作り方から使い方まで』岩波書店、2019年、79頁)。日本において政治家や政策決定の当事者へのインタビューを同時代政治研究に積極的に導入したのは、大嶽や村松を先駆と見るべきであろうと思われるが、それが、御厨らのプロジェクトの発展にどのように影響したかという点は、今後の研究課題となるだろう。
- (29) 例えば、加藤淳子『税制改革と官僚制』(東大出版会、1997年)。
- (30) 例えば、新聞の利用は、升味準之輔の『戦後政治』『現代政治』等 (ともに東大出版会) にも見られる (ただし、升味自身は、それらの著作を「糊と鋏」による新聞の切り貼りと、自嘲しているところがある)。
- (31) 実際、私も、以前、大嶽にレヴァイアサングループを代表させて論を立てたとき、大嶽自身から「レヴァイアサングループを代表するのは僕ではなくて村松さんだ」と指摘を受けたことがある。
- (32) その証左として「山口大嶽論争」があった。
- (33) 大嶽は「日本の現状なんかをアカデミックに研究できるはずじゃないか」と三谷太郎に言われたと回想し (110)、また自身でも、自分がやったことは、「現

「大嶽政治学」とは何であったのか？

代日本政治はジャーナリズムが対象にすべきで、研究者が対象にすべきでない、というそれまでの通説をひっくり返したかたちでした」と言う (121)。

- (34) この「思考パターン」には、マルクス主義的な歴史観が深く影響していることも明らかであろう。
- (35) ここには、第二次大戦後のイデオロギー対立が、日本の知識社会そして日本の政治学界に凍結されていたと言うこともできるであろう。すなわち、一方では再び戦争を起こさない国家になるためには戦前の天皇制を民主化していくことが必要であるとする立場があり、他方では、そのような「民主化」とは共産主義勢力の拡大工作にはかならないと見る立場があった。そのようなイデオロギー対立の下で、丸山らを中心にした政治学界の主流は、民主化を逆転させるもの、或いは、民主主義の成果を踏みにじろうとするものに抵抗することを自らの責任と考え、復古する（可能性のある）勢力に対抗するため、社会主義陣営と（一定の）共同歩調を戦略的に取るという選択をした（と自称する）。

これに対して大嶽は、「僕はやはり、アメリカが日本に基地を持ち日本の統治に関わる以上、日本のファシズム化などはない」と思ったと言う (202)。

- (36) 「イメージ」があるだけだから、批判・克服されるべき先行研究もなかったのであるとも言えようが、この立論の仕方に彼の巧妙さ、というか反論のされにくさ（そして、その故にこそその反発の起こりやすさ）があったとも言えよう。
- (37) 畠山弘文『近代・戦争・国家』文真堂、2006年、新川敏光『日本型福祉レジームの発展と変容』ミネルヴァ書房、2005年、『福祉国家変革の理路』ミネルヴァ書房、2014年。
- (38) ここで洋子夫人と大嶽との関係が、機能的協力関係であったのか、それとも権力的関係であったのか、と意地悪を言う者もあるだろう。
- (39) 大嶽の権力論は『現代日本の政治権力経済権力』の冒頭におかれている（また、曾根・鴨との共著『政治学』で大嶽執筆の権力論を確認することができる）。この理論形成について本書では次のように語られている。

それはシカゴのケネス・プレウィットの授業で、ライト・ミルズの『パワー・エリート』を読んだの議論のシーンである（なお、ここでの回想でも、大嶽の権力論・影響力論は、このプレウィットから影響を受けたものではなく、この講義以前に、大嶽が『パワー・エリート』から自ら開発したもののように読める）。

「そこで、権力には二つの側面があるという議論を僕がしました。一方で、政治権力は人民を支配している。他方で、政治権力に対する影響力というものがある、と。例えば企業が政府に対して影響力を行使する場合に、こういう権力の存在があって、影響力の意味が出てくるのです。権力がなければ影響力の意味がない。そういう二重構造があるということを僕は主張して、プレウィットは僕のこ

「大嶽政治学」とは何であったのか？

とをずいぶん評価してくれました。これを発展させると、企業権力という考え方が出てきます。企業は労使関係において労働者に対する支配力を持ちますから。僕の政治権力と経済権力という議論はまさにそれで、政治にも経済にも権力関係がある。政治は政治で企業に影響力を及ぼすことがある。だから権力同士の影響力を考えることができる。さらに教会の宗教権力やマスコミの権力もありうる。アメリカ政治学では権力と影響力を分けるけれども、定義のコンセンサスはありませんし、あまり明確ではありません。ダールはそういう組み立てを議論していますが、僕みたいに権力と影響力をきちんと分けたのは見たことがない」(97-98)。

しかし、大嶽がこのように誇る整理も私にはよく理解しがたい。まず、『現代日本の政治権力経済権力』ではダールに即した影響力の定義はあるものの、「権力」という用語はそれとの関係も明らかにされず定義もされないで使われている。実際、この点は当時多くの書評によって指摘され(例えば、綿貫誠治「大嶽秀夫『現代日本の政治権力経済権力』」に寄せて『社会科学の方法』13巻10号、1980年、15頁)、大嶽自身、自らの論に「不十分」「混乱」「誤り」があることを認めている。それは、本書での回想とは十分整合しないように見える。大嶽「『現代日本の政治権力経済権力』再考(綿貫誠治氏の批判に応えて)」『社会科学の方法』14巻1号、1981年。

また、私には、大嶽が最初の著書で展開した理論装置は、せっかくダールがウェーバーの理論からアメリカ社会科学的に彫琢(換骨奪胎と言うべきか)したところのものを、いかにも安易に「支配」なる概念に再接合して混乱を来しているように思える。ウェーバーでは、「支配」は直接的な権力行使のチャンスのみに帰結されないと成り立つからこそ支配とされている。それ故にウェーバーは支配を論じるべく、権力以外に「正統性」なる概念を導入しなければならなかったのである(ダールはあえてそのような側面を排除して影響力の理論を立てていると見るべきだろうと思う)。大嶽のこの支配論では、影響力行使関係の長期化・固定化をもって支配としているだけで、この正統性のような内的側面への関心は欠けている(それ故、「政治的支配」と「経済的支配」とを並置することになる)。これは私には、(少なくとも、この時点の)大嶽において国家という論点についての思考が十分ではないことを反映しているように思われる。

(40) 大嶽『現代日本の政治権力経済権力』48頁以下。

(41) 新川「権力論の再構成に向けて」、のち『福祉国家変革の理路』所収。

(42) 畠山「見えざる手としての国家」、のち『近代・戦争・国家』所収。

(43) 「とんちんかん」とは、全共闘に対する丸山眞男の発言について、本書の中で大嶽がくり返し評する表現である(68)。この有名な丸山発言については、本書の註でもあげられている清水靖久による詳細な検討があり、大嶽の抱いた印象がいかに表面的なものであったかが知られる。清水『丸山眞男と戦後民主主義』北

「大嶽政治学」とは何であったのか？

海道大学出版会、2019年、第5章（なお、現在多く「眞男」と書かれる表記を、この本の表題が「眞男」とするのは清水の選択によるもので、誤記ではない）。

- (44) 大嶽は、日本民族の責任、日本人の責任として日本の戦争責任が追及されると、日本のナショナリズムが強まるからよくない、と政治的解説をしてみせる（238）。だが、そもそも日本という国家の責任を、ナショナリズムに依拠して追及しようとして、民族や国民の責任が俎上にあげられているのである。これらの責任を論ずるべきではないという反論は、国家の責任を論ずるなという主張として受けとめられることになり、相手国のナショナリズムをさらに刺激することになるのではなかろうか。
- (45) この近代「市民社会」という用語は、広中俊雄に従うものである。広中『新版民法綱要総論』創文社、2006年。しかし、この「市民社会」を規定する法秩序は、国家間の「戦争法」にまで当然に及ぶものではないことは、近代国際法の成り立ちの上では当然のことである。兵士の通常の対敵オペレーションが殺人罪に問われることがない、ということだけ指摘すればさしあたり十分であろう。
- (46) このような大嶽の論理を用いれば、先行世代の官僚らの不法行為による国家賠償についてさえ、後継世代の国民はその支払いにかかる税負担の責任はないと主張することになるだろう。とうてい本気で言っているとは思えない。
- (47) 「国家とは何か」という問いについては、近代以降でも、理論構築の膨大な試みと激しい論争の歴史があることを、政治学者が知らぬはずはない。それをことさら俗耳に入りやすい卑近なたとえを用いて論議の中心点をずらすとするのは、近年のポピュリスト政治家が多用するテクニックと軌を一にしているように思われる、と言えは言い過ぎだろうか。

ただし、ここで批判しているのは、大嶽の議論のしかたであって、日本の「戦争責任」の認否の是非を問題にしているものではない。近年の東アジアにおける「戦争責任論」を含む国家間関係にまつわる幾つもの論議と現実の政治的及び軍事的動向は、近代西欧に由来する国際法秩序とは根本的に相容れない要素を（おそらくは、当事者自身も無自覚のうちに）多数露わにしつつあるということには、ここで触れておいた方がいいかもしれない。

- (48) このときの議論については、「ずるいのは大西〔仁〕君で、横で聞いていて何も言わない（笑）。「どちらかを応援するならしろよ」と思ったのですが」と触れられている（□は渡部）。私はこの数年後のことになるが、大西が、自分がかつては靖国問題なんて重要ではないと思っていたが、宮田の本を読んで重要性が分かった、とゼミの学生に語るのを聞いたことがある（それはおそらく宮田『日本の政治宗教』（朝日選書、1981年）である）。

なお、ここでの議論では大嶽と宮田との間で「デモクラシー」理解に食い違い

「大嶽政治学」とは何であったのか？

があった可能性は小さくはない。大嶽は、『現代日本の政治権力経済権力』（1979年）で、日本の政治体制は民主主義的自由主義体制の主要な特徴を示しているとしている（214頁）。他方、宮田が『現代日本の民主主義』（岩波新書、1969年）や『非武装国民抵抗の思想』（岩波新書、1971年）で示す「デモクラシー」観は、フンボルト財団の奨学金審査で大嶽の研究を支持したというハンス＝ペーター・シュヴァルツならば、（宮田の盟友ゼンクハースと並べて）極左と呼ぶようなものだろう（168）。

ただし、ここで旧型の知識人として描かれている宮田ではあるが、彼もフンボルト奨学金OBとして大嶽のドイツ留学に道を開いた人物の一人であることを付記しないと、いささか公平を欠くようにも思われる。

(49) 『丸山眞男話文集 続4』40頁、また198-200頁。

(50) この点については、高位の勲章を得た大嶽自身の参与観察の結果を是非聞いてみたい（264）。